

中蒲：村松町慈光寺のスギ並木 ほか

関 繁 雄

加茂市と村松町に接する白山(1012.4m)の北側の谷合いに禅寺の名刹慈光寺がある。村松町市街への距離は、滝谷川沿いに7kmである。

四季を通じて参詣者が絶えないが、特に夏場は白山への登山口として賑う。海拔160mの鬱蒼としたスギ木立の中に、回廊で結ばれた七堂伽藍が静まり返っている。

ところが最近、県では洪水対策の上から、スギ林内を流れる滝谷川の改修計画をもち出した。理由は100年に一度くらいの洪水のためという。また村松町でも道を整備して観光開発をするらしい。

問題は洪水対策や観光開発のため、この見事なスギ木立や林が伐られてはならないことだ。100年に一度というが、それは自然のなせるわざで仕方がないのではなからうか。かつて、その様なことがあってもスギ木立が存在し、現在に至っているではないか。多少デメリットの面があっても、何百年も生き続け、天然林に近いスギ林は、それなりに安定した生態系を確立しているのである。それを今更何故破壊する必要があるのだろうか。



写真-1 参道のスギ 1991. 12. 15

1. スギ並木 (県指定天然記念物)

寺域は大変広く5.6haもある。その大部分がスギで覆われている。県指定のスギ並木はさすがに巨大で堂々としている。参道は寺入口より本堂の高台前まで約500mの距離がある。途中蛇行する滝谷川には五つの橋がある。道幅は3-4mである。その参道をはさみ両脇にスギの巨木が生育するが、その中で特に大きな胸高直径120-180cm、樹高30-40mのものを数えてみると、およそ100本生育している。県内でこれ程の威容を示すスギの並木はない。

この参道も白山への登山道として利用されているが、進行方向がほぼ南にたっている。スギの下枝は根元から2-3mの所からでているものもあるが、大部分は10-15mから枝張りがある。スギは若令樹では円錐形、老令樹では球形を示すが、ここでは参道という狭い所に適応し、樹形は円筒形である。参道内側の枝張りは2-3m、外側はそれぞれ南東または南西から南の方へ長く伸びている。また他のスギに邪魔されない所では13-15mも伸びている。枝の太さは樹幹に近い所では15-20cmにもなる。また、樹勢も大変良い。所によっては下枝が枯死しているが、一般的に枯れは少ない。樹皮も剥れず幹に穴があいたり、損傷している所もほとんどない。酸性雨による樹冠の枯死や、落雷による幹の裂けや髓の空洞もない。また斜面のスギの様に根元が曲がることもなく、スギ(真直ぐ)の名の通り立っていて見事である。

樹令は300年以上と見られているが、住職の話だと400-500年のものもあるだろうという。この寺の開基は室町時代前期、応永10年(1403)領主神戸太良最重。だがそれ以前にも白山を中心とする山岳信仰の霊場としての建物があっただろうから、大きいものは、それくらいの樹令があるかもしれない(写真-1, 写真-2)。

2. スギ林床の植物

このスギ巨木群に支えられた林内は空中湿度が大変高い。もともと両方から山が迫っている谷間に滝谷川が流れ、供給水量が多い上、スギ林のため水分が保持されるためだ。さらに、谷間のため季節風も和らぎ、冬温暖である。この河畔にはオニグルミ、ケアブラチャン、ケキブシ、クサギ、ヤマグワ、ハイイヌガヤ、ハイイヌツゲ、イワガラミ、ツルウメモドキ、マタタビなどの低木類に加え、ウババミソウ、アオミズ、キツリフネ、ツリフネソウ、モミジガサ、オオカニコウ

モリ、アカソ、スマレサイシン、ミヤマカンスゲ、ホソバカンスゲ、ヒトリシズカ、クサマオ、ミヤマイラクサ、ムカゴイラクサ、ミヤマカタバミ、オオサワハコベ、ホクリクネコノメ、ノブキ、ミョウガなど湿った所に生える植物が多い。それに加え、シダ植物が種類および量とも多く分布する。即ち、ジウモンジシダ、リョウメンシダ、サカゲイノデ、イワガネゼンマイ、ミゾシダ、トウゴクシダ、クジャクシダ、イッポンワラビ、シケチシダ、ヒメワラビ、キヨタキシダ、ミヤマシケシダ、ミヤマベニシダ、イヌシダ、ヤマソテツなどがあり、稀産種のオオバノハチジョウシダ、ヒカゲワラビ、フモトシダも生育している。また、カラクサイヌワラビはイヌワラビより多く、ノキシノブはアカイタヤやヤマウルシなどの樹幹の他、石やコンクリートの橋にコケ類と共に着生している。シダ類では総体的に南方系が多い。また、イネ科のイヌアワ、キダチノネズミガヤ、マメ科のフジカンゾウ（林床にかなり多い）、ブナ科のウラジロガシ、ツバキ科のヒサカ

キなど南方系や太平洋要素の植物も分布する。

3. 本堂裏の自然林

本堂裏には滝谷川が流れ、それに接し急斜面の山がある。ここにはカスミザクラ、ウラゲトチノキ、ミズナラ、カツラ、アカイタヤ、ヤマモミジ、アカシデ、ブナなどの高木があり、その下にユキツバキ、ヤマウルシ、ヒメアオキ、ハイイヌガヤ、チャボガヤなどの草本が生育する。特にアカシデ、ブナの混生林は自然林に近く貴重である。

4. まとめ

慈光寺は、深い谷間という立地、何百年というスギ巨木林のため、独特な植生を育んできた。これは貴重な遺産である。洪水対策ならば上部の谷沿いの斜面に植林して保存に努めた方が、長い目で効果があるのではなからうか。

(新潟市寺尾22-13)



写真-2 本堂前のスギ 1991. 12. 15

天声人語

朱色の頭をしたトキが、何羽も飛んでいる。かと思えば、アホウドリが群れをなしている光

景もある。ともに絶滅の恐れがある国際保護鳥。珍しい、昔の映像である▼今月発売された日本野鳥の会・NHKエンタープライズ企画制作『BIRDING』は、鳥の世界を知るためのビデオだ。表題のバーディングは、バードウォッチングと同じことだという。最終第七巻「絶滅が心配される鳥たち」を見て、鳥よりも人間の世界のことを考えさせられた▼絶滅寸前のトキを始め、危機にある沖縄のノグチゲラや北海道のシマフクロウ、減ってきたアカショウビン、サンコウチヨウ、コアジサシなど、数多くの鳥の生態が撮影されている▼過去二百年ほどを顧みれば、減少に人間が関係している場合が多い。アホウドリもトキも羽毛などが目的で捕獲され、オオタカは剥製にするための密猟で滅った。沖縄の山原地方

では自然林の伐採がヤンバルクイナやノグチゲラを追いつめる……▼英国の世界自然保護監視センターの報告を思い出す。一六〇〇年以降、絶滅したことが科学的にはっきりしている動物は三百一十種。ヒトコブラクダのように野生では絶滅し、動物園などで生き残っているものもある▼報告を報じた英国の科学誌は「人類が大規模な絶滅の引き金になっていくことは間違いない」と書いていた。日本鱗翅学会などの調査でも、いくつかのチョウが日本で絶滅に向かっている背景に農業の急激な近代化があることが指摘されている▼今年を説明する言葉の一つは「消滅」だった。ソ連邦も消滅し、泡のような金もうけの幻想も消えた。だが、人間の所業によって消滅させてはならないのは、自然の生態系を形づくる動物の輪である▼「生態系を一つの生き物に見立てれば、人間は周囲を破壊し増殖するがん細胞に見える」とビデオは警告している。